

津幡町^{りょう け}領家地内出土遺物の資料紹介

高見哲士 長田政彦 松尾 実

はじめに

本稿は石川県津幡町に所在する領家地内から出土した遺物の資料紹介を行うことを目的とする。

経緯は、金沢市在住の大倉和男氏が著者に本資料を所有している旨を知らせて頂いたことに端を発する。大倉氏は、平成16年度に本センターが津幡町所在の加茂遺跡で発掘調査を行った際の発掘作業員として従事していた。大倉氏は友人から「水道管を埋設する際に出土したものがあり、それらがどのようなものなのか教えてほしい。」との相談を受け、遺物を譲渡された。そして、調査担当の一人である著者に上記の経緯を説明された後に、遺物を実見させて頂いたのである。資料は破片で2点、土師器の皿と弥生式土器の壺である。出土地については、現在南北に縦断している国道159号バイパスより西方から出土しており、同地内にある埋蔵文化財包蔵地、領家遺跡の範囲外であることが判明した。現地確認を行ったところ、沖積地に立地していることが伺える。津幡町南方の沖積低地で調査された貴重な成果^(註1)から、本資料は単なる流れ込みに伴った出土を示唆する可能性よりも、むしろ集落などがあった可能性を示唆すると考えた。さらに、領家遺跡を含む周辺の遺跡から勘案して、多くの新知見が得られ、これを契機に現地点での領家地域の動態を把握することは重要であると感じた。また、埋蔵文化財包蔵地である遺跡範囲外にあることから、それが確実に広がるため、報告する義務と必要性を感じたのである。

本稿では、遺物出土地が領家地内にあることから西方に位置する埋蔵文化財包蔵地の領家遺跡を便宜的に一括し、論を進めることとする。まず、遺物が出土した領家遺跡を中心に周辺の地理的環境を言及し、資料を報告、歴史的環境を考察して、これらのまとめと評価を行いたい。

なお、大倉氏には上記の趣旨を理解して頂いたうえで起稿するに至っている。起稿するにあたり、加茂遺跡発掘調査に従事した金沢大学大学院生の高見哲士氏、奈良大学卒業生の長田政彦氏に経緯とその意義について説明したところ、文化財に対する重要性を理解し、本稿を起す必要性を感じて頂いたため、協力して頂けることとなった。幾度と勉強会を行い、3者による協議を得て検討を行っている。各章の文末にそれぞれの名前を記し、文責とする。 (松尾)

1 地理的環境

領家遺跡は、津幡町の北端、かほく市^(註2)と境を接するところにある。津幡町は石川県のほぼ中央、同県の細くくびれるところに位置しており、東に宝達山脈の南端・南能登丘陵や砺波丘陵と呼ばれる低い山地を持ち、西に河北潟を臨む地である。また、丘陵地とそこから潟へ流れ込む中小河川によって形成された沖積平野で構成されている。一方、地理的に見れば、北は能登、東は富山、南は金沢へと通じる地であり、陸上、水上交通の要衝であることが看取される。

本稿で紹介する領家遺跡は、東方にある丘陵から派生する能瀬川の堆積作用によって作られた沖積地上に立地しており、丘陵裾部分は河川の開析により広い谷底平野を形成している。また、当地は越中・能登・加賀に通じており、古来より交通の要衝であったことが推察される。なかでも、古代では津幡町内にある深見駅を分岐点とし、能登は横山駅、越中は坂本駅へとその先を繋いでいる道があっ

たとされている^(注3)。当該遺跡南方における加茂遺跡の調査成果^(注4)からは、古代の北陸道が検出されており、その延長として当該地の近隣を通っていたことが想定できる。また、中世は不明だが、近世には能登へ向かう道は能登街道（七尾街道）が機能していた。これは多田・狩賀野・宇野気を経て七窪・木津・高松へ出る道とされており、当該地を通過していることが窺える。また、河合谷方面を通る梅ヶ谷街道が通っている。さらに、近辺には鉢伏から谷へ出るありご道^(注5)と呼ばれる近道等が存在していたことから、交通路が密であったことが看取される。このように、少なくとも平安時代頃から当該地域は陸上交通における要衝であったことが考えられる。また、現在は干拓されているが、当該遺跡は西に河北潟を臨んでいる。江戸時代には貨物の運搬に限らず、旅人を運ぶ舟運も往来していたようである。少なくとも近世以降は河北潟を利用した水運が整備・運用されていたことが分かる^(注6)。それらを鑑みるに、古くより河北潟が水上交通路として利用されていたことが窺える。

丘陵地と比べ、沖積地は堆積の度合いが多く遺跡は発見され難いが、当該遺跡は谷を抜けた広い平野上に位置しており、越中・能登・加賀を繋ぐ陸運や河北潟を利用した水運を結んだ交通の要衝であったと推定されることから、立地的に人が住むのには好都合だったと考えられる。（長田）

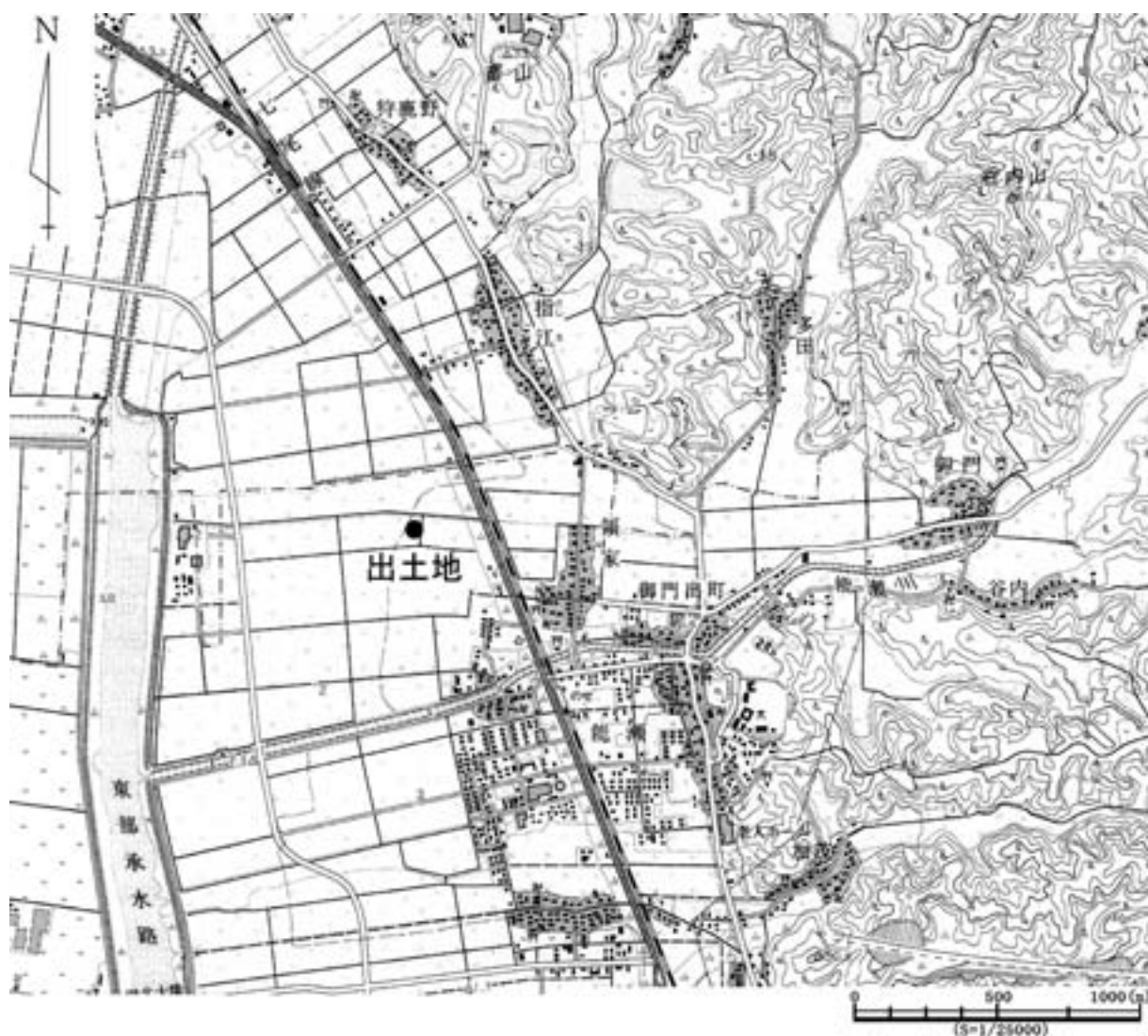


図1 出土地位置図

2 資料報告

(1) 出土地

本資料は、領家遺跡の西方約500mの地点から出土した。現在は、土地圃場整備のためか整然とした水田が広がっており、区画割りがされている道脇にはコンクリート製U字溝が南北に走っている。出土地は図2で示している地点にあり、そのU字溝埋設時に発見されたようである。G.L. (Ground Level=現地表面)はT.P. (Tokyo Peil=東京湾平均海水面) + 約3mにあり、それから下約3m地点で本資料が出土したようである。また、G.L. 下約2.5mでも土器が多く出土したようである。すなわち、T.P. +0.5~±0mの間に遺物包含層があったことが考えられる。本資料以外の遺物の多くは水道管理設作業完了後、埋め戻し時に排土とともに廃棄されたようで、そのなかで残されたのが本資料となる。なお、周囲が水田といった立地から土質は粘土、シルトなどの沖積地堆積層が想定される。おそらく、いくつかの文化層があったと考える。

(2) 出土遺物

観察所見を種類、器種、法量、胎土、焼成、色調、調整、所見、時期の順に述べていく。なお、色調は標準土色帖^(注7)に依拠する。図2の実測図を参照して頂きたい。

1は弥生式土器の壺底部片である。底部径は6.2cm。胎土は密で、直径3mm以下の白色砂粒(石英・長石・雲母等)、海綿骨針を少量含む。焼成は良好で、やや硬質。色調は、内面が灰白(2.5Y 7/1)色、外面がにぶい黄橙(10YR 7/2)色となる。調整は、内面にユビ押え痕、縦方向の指ナデが施され、時計回りにめぐる。外面は板状工具によるナデが時計回りに施され、後に一部横方向のナデがある。底面には、植物の圧痕が無数見られる。また、外面と内面には一部黒斑が認められ、焼成方法が野焼きであったと考える。さらに、底部外面から粘土の接合部が認められることから、粘土紐を輪にしてから底部を成形したと考える。時期は弥生時代後期後半に属する^(注8)。

2は土師器の皿底部片である。底部高台の1/2が欠損している。法量は底部径が5.4cm。胎土は

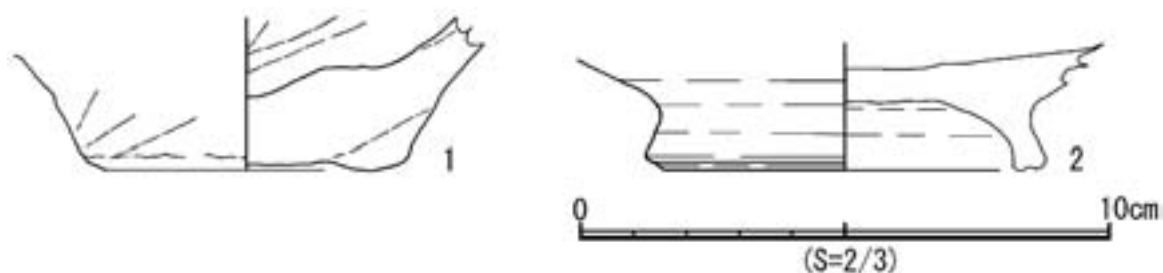


図2 出土遺物実測図



写真1 出土遺物 1



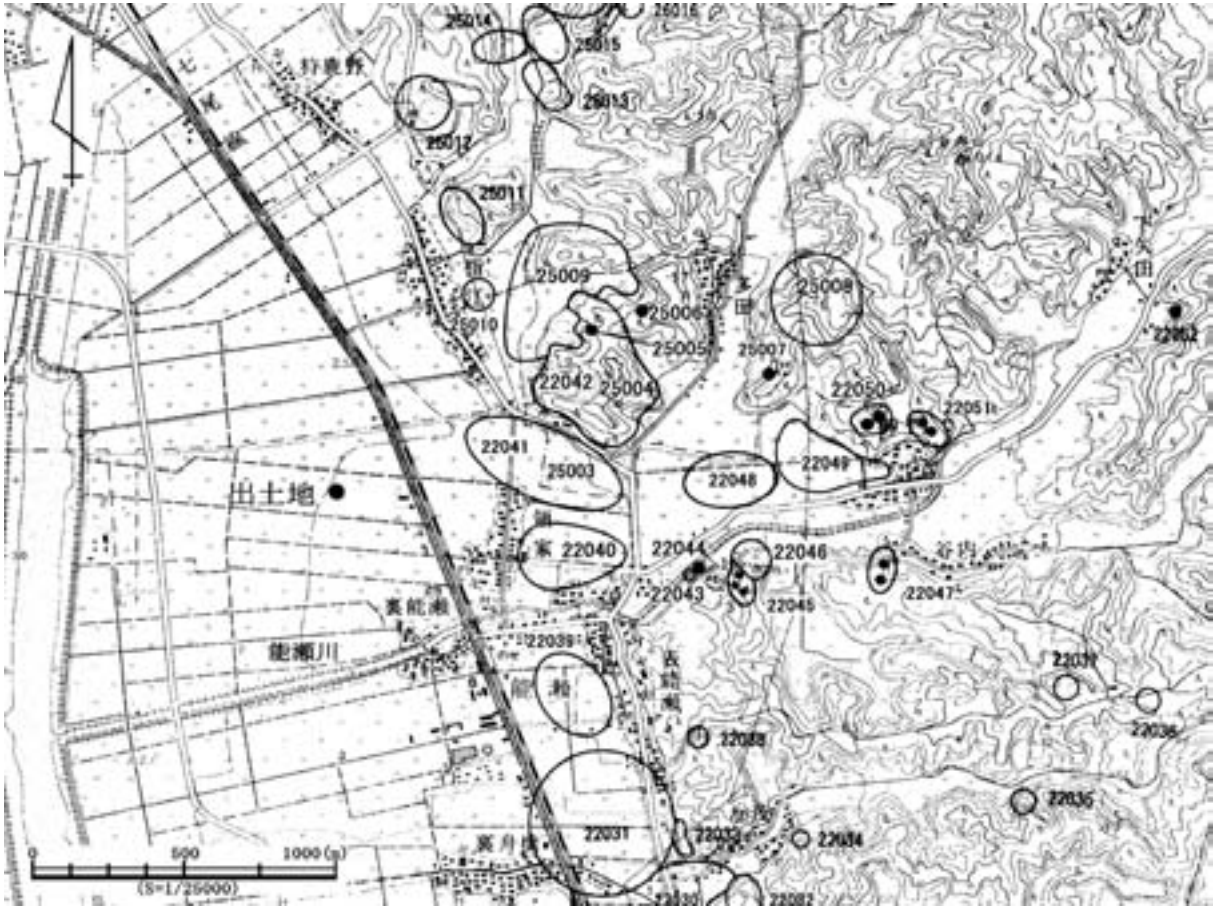
写真2 出土遺物 2

密で、直径2mm以下の白色砂粒(石英・長石・雲母等)、海綿骨針を少量含む。焼成は良好で、硬質。色調は、外・内面ともに灰白(2.5Y8/1)色である。調整は内外面ともに回転ナデで、回転方向は時計回りとなる。底面には回転糸切り痕が見られる。高台は底部糸切り後に貼り付け、回転ナデを施したと考える。胎土、焼成などから窯で焼成(酸化焰焼成)されたと考える。時期は平安時代前期(9世紀後葉)と推定する^(註9)。(松尾)

3 歴史的環境

本章では、能瀬川水系の遺跡群を時代ごとに概観し、今回報告する遺物と近年の調査成果を踏まえ、領家遺跡の歴史的評価を行なう。

なお、領家遺跡は1992年に石川県教育委員会が発行した『石川県遺跡分布地図』で奈良時代～中世の複合遺跡として周知されている。



（１）旧石器・縄文時代

能瀬川水系における旧石器時代遺跡は未だ発見されておらず、現時点では縄文時代中期中葉頃から人の活動痕跡が認められるようである。

縄文時代の遺跡は、ほとんどが丘陵地あるいは丘陵裾に立地している。谷内石山遺跡では、中期中葉の土坑が検出されており、落とし穴と推定されている。これは該期における活動の一端を示しており、東側の山間部で狩猟活動が行われたことが窺える。周辺の丘陵上においてもこれらの活動痕跡が遺存する可能性は十分予想される。

後期になると、往時の状況がより詳しく見られるようになる。能瀬クサヤマ遺跡から流紋岩質の磨製石斧が採集されており、宝達山東方の鶏坂付近からその石材が入手された可能性を指摘されている^(注10)。気屋遺跡でも出土した磨製石斧の4割が宝達山系の流紋岩で構成されており、他の出土石器の石材も遺跡から40km圏内で入手可能とされている^(注11)。これらの成果から、能瀬川水系でも生活に密着して使用される石器の素材は周辺でまかなえたことが窺えよう。ただし、実証できるデータが不十分で、遺跡間の相関関係についても言及できないのが現状であり、将来の検証・検討作業が不可欠となる。他に、気屋遺跡では礫石錘や土器片錘、石皿、敲石が出土し、動物遺体分析では魚類、鳥類、哺乳類で焼けた痕跡があると指摘されている^(注12)。また上山田貝塚も豊富な動物遺体資料で知られ、他に石錘等が出土している^(注13)。これらの遺物の特性からは、漁撈、狩猟、植物採集、食料加工（調理）をしていたことが想起され、生業、生活の一端を知ることができる。特に川・海・沼・潟等の水域を資源獲得領域とした漁撈活動が行なわれていたことは想像に難くない。能瀬川水系においても同様な推測ができるが、調査事例が多くないため具体的な様相を示すことは難しい。近年、低湿地における調査事例が全国的にも増加していることから、その条件を満たす当該地域においても遺跡が遺存している可能性は否定できないため、注意を要する。

以下では、立地からその可能性を考察したい。

能瀬川水系における平地での縄文遺跡は河北潟の海進・海退による海面水準の変動と関連性がある。藤氏の推定^(注14)によると、縄文早期から河北潟の海面高度は現海水面から+5m程度であり、中期頃には現在とほぼ同じ海面水準となり、指江付近は水域であったという。中期末葉以降は海面水準が低下し、現海水面から-2m程度を推定している。また、平口氏は上山田貝塚の立地分析において河北潟の縄文時代前期の汀線をT.P.+2.5m、中期前葉後半の汀線をT.P.+1.2mとする仮説を提示している^(注15)。そこで、領家遺跡周辺には平地に立地する縄文時代の遺跡が幾つか存在するため、河北潟の海面水準の変動を反映するこれらの遺跡の標高を検討し、低地における遺跡が遺存されている可能性の有無を見出したい。平野に立地する指江A遺跡は未調査であるが、縄文時代の石匙が採集されており、現地表の標高は+2.7~3mを測る^(注16)。丘陵裾部に立地する指江B遺跡では縄文時代後期の土器片が4点出土しており、最も標高の低い出土地点で約+5.5mとなるが、これより下層に縄文時代の集落が存在する可能性が指摘されている。指江遺跡では、縄文式土器（後期か）2点が出土しており、検出された標高は約+3.2mである。これより下層に文化層の存在が想定できよう。そして、領家遺跡における縄文時代の文化層は標高約±0mより下となることが想定できる。さらに、加茂遺跡では、縄文時代中期末葉～後期頃の河道が検出された標高は約+3.7mである^(注17)。当該遺跡南約4kmに位置する北中条遺跡では縄文時代の遺構検出面の標高は約+3.7mで、後期中葉以降の土器が一定量出土している。低地においては概ねT.P.+3.7mを目安にして広範囲に縄文時代の遺跡の存在が予想できる。将来、それより下層にも縄文時代の遺跡の存在が予想される。

このように、平地に立地する周辺の遺跡からは、縄文時代の遺構・遺跡が次々と発見されており、

能瀬川水系における低地進出の可能性は十分に予想される。さらに、斎藤氏の現河北潟沿岸の測量によると、能瀬川流域の低地は堆積作用によって微高地が形成されたことが明らかになっている^(注18)。上記の藤氏や平口氏の河北潟水位の推定を勘案すると、領家遺跡の地表の標高は縄文時代中期末葉以降、河北潟の水位を上回り、陸地であったと推定できる。よって、河北潟や能瀬川等の水域を利用した生業活動に適した環境に立地する領家遺跡において、陸地であった縄文時代中期末葉以降の遺構・遺物が遺存する可能性は十分に予想される。

以上、縄文時代後期では河北潟の水位は低下しており、人の活動範囲が広くなり、平地へ進出した可能性が指摘できる。河北潟に面した低位の丘陵斜面あるいは平地を生活領域とし、その周囲の水域と山間部を資源獲得領域として生活を営んでいたことが考えられるが、あくまでも想定のをでず、縄文時代の平地での活動や、環境がどのようなであったか未だその様相は明らかでない。こうした点を解明する上で領家遺跡は重要な意味を持つ遺跡といえる。

(2) 弥生時代

能瀬川水系における弥生時代の遺跡は少数であり、谷内石山遺跡、能瀬川の谷口の左岸に領家遺跡、右岸に能瀬遺跡、指江 B 遺跡が分布する。そのうちの指江 B 遺跡では前期末～中期前半頃の条痕文系土器が発見されているが、それ以外の状況は不明である。以降は空白となり、後期になると遺跡が散見される。T.P. +約30m の狭い尾根上にある谷内石山遺跡では、後期後葉の断面 U 字状の環濠を持つ集落址が見つかった。計 4 棟の住居址が検出されているが、土採りによって破壊された部分を含めると10数棟存在していた可能性を示唆している^(注19)。ただし、環濠についてはその機能と性格を特定するのには疑問の余地がある。また、丘陵上の高地に立地する集落は鉢伏茶臼山遺跡(後期)、加茂マメダン山遺跡(中期～後期)でも検出されている。後期になって増加する傾向^(注20)を示すようであり、周辺の動向と連動していた可能性がある。なお、当該地域でも地形から勘案して墳丘墓などがある可能性が予想される。

一方、平野部における遺跡の動向は現在のところ不明である。『津幡町小史』、『津幡町史』によると、能瀬地区内からは、太形蛤刃石斧と磨製石鍬が採集されており、平野における弥生文化の受容・展開を考える上で示唆的といえる。また、今回報告した出土遺物 1 は、弥生時代後期後半の時期にあたる。出土地は図 1 で記した箇所で、平地にも遺跡が広がることが判明したことは、当該地域の動態を考えるうえでも重要と考える。加茂遺跡を例にとると、弥生時代中期～後期の水田・住居址が検出されており、谷口の平地に稲作水田農耕が営まれていた証左となる事例が提出されている。さらに加茂遺跡で磨製石包丁や蛤刃石斧が発見されることはその傍証となり、弥生文化が少なくとも後期には当該地域の平野部にも受容・定着したと理解できる。そして、加茂遺跡付近の地形は、小河川に開析された丘陵と堆積によって形成された谷部の平地で構成される。この地形は規模の違いはあるものの能瀬川水系の地形と類似性が認められるため、能瀬川流域においても、少なくとも当該時期には丘陵上と平地に集落などが展開して土地利用を行っていたと推測する。後期におけるこれらの状況は、中小河川沿いに集落が定着する時期にあたり、「弥生時代後半期に拠点集落は分散・解体し、水系を基盤とする小地域ごとの集落群の核を形成した。」との指摘^(注21)と一致するようである。しかし、安氏も指摘している通り北加賀地域に卓越する規模の集落が存在しないため、規模による格差を検討できない状況にある。河北潟北東岸という地域レベルで見ると、小河川流域単位ごとに集落が営まれていることが看取されるが、データの蓄積を待つより他ない。

(3) 古墳時代

能瀬川の両岸には能瀬石山古墳、谷内石山古墳群(全て円墳で、1 号墳径約19m、2 号墳径約14m、

3号墳径約8.5m)、御門A・B古墳群（円墳2基、方墳2基でそれぞれ径約8m、辺約10m）指江古墳（方墳辺約12m）、谷内横穴墓群、下矢田横穴墓、多田西ヶ峰横穴墓が存在しているが、詳細が判明しているものは少ないのが現状で、概して小規模な古墳が多い傾向を示唆する。なかでも、古墳時代中期後半～後期の円墳（径約10m）である能瀬石山古墳からは副葬品が出土しており、被葬者の性格が窺える。副葬品は勾玉、ガラス小玉、鉄製直刀、鹿角装直刀、鉄鏃があり、武器が多いことも注目される。なお、周辺地形から勘案して未発見の古墳があることは予想に難しくない。これらの能瀬川流域の古墳の編年は、小嶋氏によって試案が提示されている^(注22)。すなわち、4世紀前半に御門A古墳、5世紀に谷内石山古墳、5世紀後半に能瀬石山古墳が造営されたとする見解である。ただし、資料的な制約があるため、将来各古墳の調査や新規古墳発見のために修正される余地は残されている。

集落についても調査事例が少ないため、詳細は不明である。ただし、指江B遺跡からは掘立柱建物や河道などが確認され、貴重な成果が上がっている。当該地域を考える上で特性として捉える貴重な遺跡であるため、以下では指江B遺跡を中心に述べていきたい。集落は谷筋に中期末以降、連綿と継続して営まれていたことを示唆しており、居住域として安定した利用がなされていたと理解する。掘立柱建物が幾度と建替えがなされていることは、その傍証となると考える。また、後期の河道からの出土遺物は多く、玉類や須恵質埴輪などが発見されており、特異な遺物の存在が注目される。玉類については、遺跡内に製作遺構がなく、未製品も少ない。さらに玉の材料が、ガラスや緑色凝灰岩を使用していることを考慮すると、遺跡外から製品を入手したと推測できる。このことから、交易あるいは交換による物品の入手が窺え、指江B遺跡が拠点的な性格を有していた可能性を示唆する。また、周辺に埴輪を配置した古墳の存在が想定されている。特に、須恵質埴輪は、南加賀の二ツ梨殿様池窯跡群で生産された可能性を示唆しており、政治的・社会的動向を考える上で示唆的である^(注23)。特筆すべきは、百済系とされる韓式系土器の存在であり、直接・間接的にも渡来系集団との関係性が濃密といえる。石川県下では、その研究はほとんどなされていないが、渡来系集団は、地域を支配する首長の政治的・社会的変革があった事象と大きな関係性があったと考えられ、重要といえよう^(注24)。

指江B遺跡は、陶邑産の須恵器が搬入され、埴輪を有した古墳が周辺に存在したことなどから畿内の影響を少なからず受けたことを示唆している。従来の支配システムが不安定であり、その補完として外部もしくは新規の力を利用した可能性も考えられる。当該地域においても畿内王権との関連性があったことを指摘する。さらに、渡来系集団が、従来の支配者構造に組み込まれた可能性があり、より強固な基盤を築いたと考える。土地の開発や技術などの分野で活躍したかもしれない。このような動向があったことは、周辺に影響を与えなかったとは考え難く、領家遺跡においても関連する遺構などの存在が予想される。

（4）古代

能瀬川水系の遺跡分布は、谷口に御門遺跡、御門ジャモチ遺跡等があり、さらに指江B遺跡、領家指江ハシバ遺跡、能瀬遺跡が丘陵沿いの平野部一帯に広がる。丘陵地では谷内石山遺跡、能瀬クサヤマB遺跡が存在している。これらの遺物の出土分布は、谷部の平野に沿って遺跡が偏在しているため、生活領域の中心が平地にあったことが看取される。

指江B遺跡では、四面庇付床張建物が発見され、出土した木簡には「大国別社」、墨書土器には「寺」の文字が確認されている。その性格は宗教施設と考えられており、重要拠点であったとされている。建物周辺には、河道からは漆かきとり棒、漆液容器などが出土しており、8～10世紀にかけて漆生産が経営されていたことが判明している^(注25)。鍛冶生産をおこなっていた証左となる鞆の羽口も出土している。宗教施設周辺では、専業集団による手工業生産経営の存在が読み取れ、分業体制が確立した

事象として捉えられる。交通面でも、能登国や越前国からの人や物資の移動が指摘されており、こうした物資や土地の管理施設あるいは管理者がいた可能性が指摘されている^(注26)。他に谷内石山遺跡では奈良時代後半～平安時代前期頃の畝間溝が検出されており、畑作が行われていたと考えられている。近年、勝示札が出土した加茂遺跡からは、奈良時代初頭には構築され9世紀後半には管理を放棄された古代北陸道や、外国製の方形帯金具、多量の墨書土器等が発見されている。古代北陸道は深見駅より能登方面と越中方面に分岐することが考えられており、勝示札に「深見村」の記載がある点や深見村には関がある可能性^(注27)もあることを考慮すると、この地域が交通上重要な役割を果たしたと推測される。また、方形帯金具は渤海使との関連が窺われる。さらに、加茂遺跡の北にある加茂廃寺跡では大型掘立柱建物や瓦塔が発見され、寺院と駅家との関係性が注目される。今回採集された出土遺物2については、従来の領家遺跡の遺跡範囲より西側にあることから、居住域が広がることを示唆し、低地に展開した可能性を指摘できよう。

また、当該期は全国的に土地開発が各地で行われていたことは周知されている。地域においても北陸道施工に伴い、周辺地形の整備も行われていたと考えられる。当該期には、少なくとも9世紀中頃には条里制が施行されていたことが文献によっても裏付けられており、北中条遺跡周辺において試案が提出されていることは示唆的である^(注28)。ただし、古代の条里制にともなう坪境が地籍図などによって反映されているかといえ、多に疑問であり、将来平地部を調査されるに際して、断面観察と平面による擬畦畔の確認を行い、検証していく必要がある。

(5) 中世以降

中世以降の領家遺跡周辺の遺跡は、数多く存在するがほとんどが詳細不明である。領家指江ハシバ遺跡からは陶磁器が出土し、他の遺跡では珠洲焼が採集されていることは、人の活動領域が丘陵地から平地までより広がったことを示しているといえ、古代よりもさらに開発が増したと考える。

多田と領家にまたがる標高約30mの丘陵上には英田広済寺跡が存在し、『石川縣河北郡誌』の記述から文献上の廣済寺に比定されている。調査では、丘陵上に平坦面や切岸・曲輪状の地形が形成され人為的改変が行なわれたことが判明している。『官知論』には、15世紀末に廣済寺を中心とする一向一揆側の将兵五千余騎が富樫政親救援軍を撃破したと記されており、当時は能瀬川流域における中心的役割を果たした寺院であった。しかし、その所在地については様々な説があり、能瀬川上流の菩提寺や16世紀末の金沢移転前には領家集落の西の河北潟寄りにあったと伝承されている^(注29)。廣済寺の所在地は未だ確定できていないが、地理的に近接している領家遺跡とその西側は英田広済寺と深い関連を持つと考えることができ、広済寺跡と関連する遺構が存在する可能性がある。

一方、能瀬川右岸の標高約77mの丘陵上に中世の山城とされる多田城跡がある。多田城は『越登賀三州志』や『石川縣河北郡誌』に記述がある。調査では、南側に対して防御する意図を持った短期的城塞であった可能性を指摘する。また、谷内尾氏は主郭と付属施設で構成され、防御施設を持つBⅡ型に分類し、在地土豪クラスの詰城として築城されたと推定する^(注30)。周囲の城館跡には、上記の一向一揆系城館寺院である英田広済寺跡、鉢伏茶臼山城跡とその出城的位置にある森城跡、上田山城跡があり、河北潟と東に広がる山間部との間に並ぶように立地する。後述するが、河北潟沿いの道が通っており、城館跡がそれぞれ河北潟北東岸の陸路の要所を押さえる役割を持っていた可能性を指摘できる。

中世以降では文献に多くの当該地域における記載があり、具象として捉えられるが、資料批判による精緻な研究が行われる必要がある^(注31)。以下に概観してみたい。

中世には領家遺跡付近は南英久保と井上庄の境界付近となった。13世紀初頭に北英久保の地頭代覚

心と現在の宇ノ気町付近の金津庄雑掌法眼祐豪による土地争いがあったことが、『温故古文抄』に記されている。また、『祇園社記』によれば、14世紀半ばに北英久保の萱野が梶井門跡から祇園社祈禱領所に安堵されたと記載される。その後、萱野は守護富樫昌家の被官河口氏らが押領したため、祇園社が訴え、室町幕府は守護富樫氏に押領停止を命じている。

その後も萱野は在地有力者による支配が進むが、一般にこの時期は荘園の管理・支配を在地有力者である地頭に委ねざるをえなくなる時期に当たる。南英久保に含まれる領家付近も上記のような土地争いが起き、こうした動向を受けたと考えることができる。

南北朝時代には守護富樫昌家の弟満家が英田小次郎を名乗り、英久保との関連を示す。萱野の押領も富樫氏が絡んでおり、さらに、『遊三国嶺記』には富樫氏が地頭職にあり、領家付近に居住したことが記載されている。この時期、領家遺跡付近は地域支配者であった富樫氏の管理する田地の一部であり、付近に居館が存在した可能性がある。

15世紀末には聖護院門跡道興が残した旅行記『回国雑記』の和歌に津幡付近が散村であったことが記されている。彼が津幡から高松方面へ移動する際に領家付近を通過したことが指摘されている^(注32)。守護大名富樫政親を一向一揆が打倒した後、16世紀には加州三ヶ寺と超勝寺や本覚寺との争いが加賀に及び、英田広済寺が超勝寺・本覚寺統制下に置かれている。『天文日記』によれば一向一揆体制下であって、河北五番組として組織された有力農民の中に指江や能瀬、谷内の名が見える。これらの名が見られる記述は主に土地・年貢問題に関するもので、有力農民の勢力が体制の基礎を担っていたことが分かる。この時期、能瀬川水系は農地に立脚した経済基盤があり、村落レベルで統合された組織があった。領家遺跡付近は有力農民らの田地あるいは居住地であった可能性がある。

近世の領家は、河北郡領家村として加賀藩の支配に組み込まれた。領家村の周囲には、舟橋村、能瀬村、谷内村、御門村、多田村、指江村がある。17世紀には領家村の百姓数が26であったことが『高免付給人帳』に記され、19世紀には『河北郡村々書上帳』に245人、『高免家数人数等書上』に290人であったことが書かれている。これは、領家村の開発が進み、人口が増加したことを示している。また、19世紀の十村役名に野瀬の名が見え大庄屋が近世後期に存在したことが分かる。そして、「能州道中図」に津幡から高松への経路に領家付近を通る道が描かれている。また、「加州河北郡図」や「賀州河北郡図籍」には舟橋に舟橋不湖、狩鹿野に狩鹿野不湖と呼ばれる入り江が描かれていたが、19世紀半ばの「河北郡分間絵図」では陸地に干拓されている。不湖の利用について、斎藤氏は周期的な水稲耕地と漁場であり、畝田として標高の高い部分から開発されたと指摘する^(注33)。19世紀には大庄屋を輩出できる程の経済基盤を不湖や河北潟の開発によって得ていただろう。その他、近世の領家周辺の文化財には能瀬道標が残っている。御門・種方面と高松方面の分岐点にあり、領家付近に三叉路があったことが指摘され^(注34)、近世においても交通路が領家付近を通っていたことが分かる。

領家遺跡付近は河北潟と能瀬川による堆積地形を利用した活動が行なわれてきた。現在では七尾線や産業道路が通り、宇ノ気と津幡を結ぶ交通の面でもこの地域が一定の役割を果たしている。(高見)

4 まとめ

本資料は、領家遺跡西方約500mの箇所で見られている。遺跡の範囲外で大幅に範囲が拡張、改定されることとなる。また、当地域は従来から古代からと考えられていたが、本報告によって少なくとも弥生時代から連綿と継続して遺跡が形成されていた可能性がでてきた。本資料は、少なくとも当地域における弥生時代からの歴史を解明する上で重要であると評価したい。

縄文時代については、後期段階で一定の石材流通網が構築されていた社会の一端にあることが窺え、かつ生活の場が丘陵や、海水位の影響を受けながらも平野部で展開されていたことが想定できることを指摘する。縄文時代の平地での活動や、それぞれの小河川や谷と河北潟がどのような環境であったか明らかにする上で領家遺跡は多くの示唆を与えるデータを残すと考える。

弥生時代の領家遺跡は、出土遺物1から能瀬川水系に居住した集団の平地利用の一端を知る上で示唆に富み、集落や水田などといった居住域、生産域があった可能性を指摘する。また北加賀における集落の動態・様相を考察する上で貴重なデータを有する遺跡といえよう。

古墳時代では、能瀬川水系の谷口周辺流域が中期末頃には畿内の影響を受けた地域であることが指摘できる。さらに、後期になると、渡来系集団も居住した地域といえ、低地における領家遺跡の様相も関連性が示唆され、注目される。

古代では、出土遺物2からは当該期の遺跡がより西側にある可能性が高くなったことは、集落や施設などの居住域があった可能性を指摘する。さらに、古代北陸道の経路が森田氏^(注35)や三浦氏^(注36)によって推定されており、双方の推定とも加茂～指江間を通るものとなっている。そのため、領家遺跡は古代北陸道をはじめ当時の交通とその管理者に関する重大な発見があると予想される。文献との検討を含め、領家遺跡は加賀立国前後の律令国家による地域支配の一端を明らかにする上で極めて重要な地域である。

中世以降は、東に広がる山林と能瀬川の水利用で支えられた幾つかの農村が存在し、能登への交通路が通っていた要所であった。そして、その農村を統合した小地域の有力者が管理を行なったと考えることができ、将来これらを実証するデータを得る必要がある。

本資料は、沖積地における遺跡の存在と各時代の様相を示唆するものとして貴重な資料であると評価したい。また、領家遺跡周辺は河北潟の汽水域の変動、縁辺の土地利用などに関して示唆に富む情報が得られ、自然環境と人々の土地利用の変化を考える上でも興味深い地域であるといえよう。なお、近代についてであるが、領家遺跡は主



写真3 地籍図表紙紙



写真4 領家村地籍図（紙上が北方位）



写真5 領家村地籍図全図

に生産域であったことが判明している。現在の集落あたりは、神社や墓地などがあり、自然地形に即した区画の水田が営まれていた。また、河北潟に面するところは水田となっており、東西に細長い短冊形に区画されている^(注37)。

本資料の保管場所についてであるが、冒頭に大倉氏が所管していたが、後になって著者に遺物を譲渡された。しかし、文化財（共有財産）を私物化するのは資料の再検討、再評価がされにくい。一個人が保管するよりは、公的機関に譲渡して保管してもらうことが本義ではないかと考えた。そこで、本資料の出土地が津幡町の行政区画内にあるため、津幡町教育委員会生涯学習課の中嶋氏、戸谷氏を伺ったところ、遺物の保管について快く承諾して頂いた。よって、本資料は津幡町教育委員会が保管していることを明記しておきたい。本稿の資料が広く活用されることを切望する。

今回のような工事に際して発見された遺物はわずかであるが、多くは埋め戻し時に廃棄されているようである。本来ならば、文化財担当者に連絡するところである。このような事態を事前に防ぐために、各行政機関においても関連する他部署に文化財の法的かつ歴史的 understanding を得る必要性があることを強調したい^(注38)。さらに、文化財に関する情報（立会・試掘などの調査報告）は周知する根拠となるため、開示されることを提言したい。

最後に、資料の収集にあたり、徹底したものとはいえず、また十分に活かすことができなかったことは大いに反省すべき点である。ご教授・ご叱正頂けば幸いであり、今後の糧としたい。本報告に際しては、資料提示、譲渡して頂いた大倉和男氏をはじめ、以下の機関、方々からご教授、ご協力を頂いた。氏名を記して感謝の意としたい。

石川県立図書館 英田 慧 大倉和男 大西 顕 杉本芳江 鈴木真之 柿田祐司 濱田景子
久田正弘 廣田典之 中嶋徹朗 戸谷邦隆 安 英樹 柳生俊樹

（高見、長田、松尾）

【補注】

- (1) 津幡町内に所在する加茂遺跡、北中条遺跡、中橋遺跡等。津幡町教育委員会 戸谷邦隆氏よりご教示頂いた。
- (2) 平成14年の市町村合併により、旧宇ノ気町、七塚町、高松町が新市名「かほく市」となった。
- (3) 平川南監修・（財）石川県埋蔵文化財センター編2001『発見！古代のお触れ書き（石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札）』（株）大修館書店
- (4) 同注3文献他加茂遺跡関連は参考文献参照。
- (5) 宇ノ気町史編纂委員会1991『宇ノ気町史 第二輯別巻集落誌』石川県河北郡宇ノ気町
- (6) 内日角村の波止場から須崎村に達する潟下りは公用の場合に利用されていたが、安政七年（1778）になってからは許可書があれば商人荷物の運送も許されるようになった。また、明治になってからはテント船と呼ばれる船で各地と交通し、テント組という株組織が作られていた「石川県津幡町史」。
- (7) 小川正忠・竹原秀雄編2004『新版 標準土色帖』（26版）農林水産省農林水産技術会議事務局監修 日本色研事業（株）
- (8) 久田正弘氏・安英樹氏よりご教示頂いた。当該資料の時期は下記の編年案に準拠した。
楠正勝1996「第5章まとめ 第1節 弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』（『金沢市文化財紀要』119）金沢市・金沢市教育委員会
- (9) 柿田祐司氏よりご教示頂いた。当該資料の時期は下記の編年案に準拠した。
望月精司1991「第5節小結」『戸津古窯跡群Ⅰ』小松市教育委員会
望月精司1992「第4章出土遺物 第5項 須恵器のまとめ」『戸津古窯跡群Ⅱ』小松市教育委員会
- (10) 津幡町教育委員会1990『津幡町谷内石山遺跡Ⅱ』
- (11) 藤則雄1996「第4章第4節第2項 石器の石質」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会
- (12) 平口哲夫1996「第6章 気屋遺跡出土の動物遺体」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会

- (13) 宇ノ気町教育委員会1979『上山田貝塚―石川県河北郡宇ノ気町上山田遺跡調査報告―』
- (14) 藤則雄1970「第二編 十五 地形と地質」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場
藤則雄1983「北陸における新石器時代の海水面変動と気候変化」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- (15) 平口哲夫1984「北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境」『石川考古学研究会々誌』第28号 石川考古学研究会
- (16) 以下の出土高・標高値は石川県発行「昭和49年8月測図 地形図 五千分の一」と各報告をもとに概算した。
指江 A 遺跡・領家遺跡は上記の地図から、指江遺跡・指江 B 遺跡は石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター2002『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』による。指江 B 遺跡の縄文集落の可能性については、大西顕2002「第4章第2節 平成11年（1999）年調査」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センターが指摘している。なお、領家遺跡は上記の地図から現標高を概算し、今回報告する遺物の出土高から推定した。
- (17) 2004年度加茂遺跡調査においての成果を松尾氏よりご教示頂いた。
- (18) 齋藤晃吉1970「個別研究三 河北潟々開墾史」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場
- (19) 津幡町教育委員会1980『津幡町谷内石山遺跡』
津幡町教育委員会1990『津幡町谷内石山遺跡Ⅱ』
岡本恭一2004「谷内石山遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第12号』石川県埋蔵文化財センター
- (20) 安英樹氏よりご教示頂いた。
- (21) 安英樹2001「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報第6号』石川県埋蔵文化財センター
- (22) 小嶋芳孝1979「北加賀地域の概観」『北加賀地域古墳群分布調査報告』石川考古学研究会 能瀬石山古墳に関して津幡町教育委員会1990『津幡町谷内石山遺跡Ⅱ』による。
- (23) 指江 B 遺跡の古墳の存在と須恵質埴輪に関しては、以下を参照した。
久田正弘・松尾実2003「指江 B 遺跡出土の埴輪片をめぐって」『石川県埋蔵文化財情報第9号』石川県埋蔵文化財センター
- (24) 鈴木靖民編2001『倭国と東アジア』日本時代史2 吉川弘文館
- (25) 四柳嘉章・四柳嘉之2002「第5章第1節 宇ノ気町指江 B 遺跡出土漆器の科学的分析」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
- (26) 湯川善一2002「第8章第2節 指江 B 遺跡出土二～十号木簡」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
- (27) 平川南2001「第4章第2節 古代の通行手形 - 過所様木簡」『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』平川南監修 石川県埋蔵文化財センター編 （株）大修館書店
- (28) 津幡町史編纂委員会1974『津幡町史』石川県津幡町役場
- (29) 宮本哲郎1991「英田廣濟寺跡を訪ねて―城郭寺院調査の記録（19）―」『石川考古』第204号 石川考古学研究会
- (30) 谷内尾晋司2002「第2章第1節 城館跡概観」『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）』石川県教育委員会
- (31) 中世以降における史料の記述は、主に以下の文献によった。
河北郡役所1920『石川県河北郡誌』、津幡町役場1962『津幡町小史』・津幡町史編纂委員会1974『津幡町史』津幡町役場、宇ノ気町史編纂委員会1970『宇ノ気町史』宇ノ気町役場、同1991『宇ノ気町史第二輯別巻集落誌』宇ノ気町役場、角川書店1981『角川地名大辞典』、平凡社1991『日本歴史地名大系第17巻 石川県の地名』、石川県教委 '94年・'95年・'02年
- (32) 瀬戸薫1994「第1章第2節 中世の北陸道」『北陸道(北国街道)歴史の道調査報告書第1集』石川県教育委員会
- (33) 同注18
- (34) 石川県教育委員会1995『能登街道Ⅰ歴史の道調査報告書第2集』
- (35) 森田悌1992「古代加賀国の駅制」『日本海域研究所報告』金沢大学日本海研究所
- (36) 三浦純夫1995「古代」『能登街道Ⅰ歴史の道調査報告書第2集』石川県教育委員会
- (37) 明治24年に作成された地籍図を基にした所見である。河北郡英田村の地籍図は石川県立図書館が収蔵している。領家はその内字として所収。領家は全図38葉で構成され、一葉にまとめているものもある。なお、写真6にあ

る色分けは田畑などの種類によるものではない。多種の地籍図が収蔵されており、旧地形、土地利用等が伺える。一般にも閲覧でき、調査にあたって大いに参考になると考える。なお、写真の掲載許可を頂いた。

(38) 以下の提言には共感できることが多い。

森岡秀人2004「遺跡の個性は地域から発信を」『古代学研究』166号古代学研究会

【参考文献】

〔報告書〕

石川考古学研究会1979『北加賀地域古墳群分布調査報告』

石川県立埋蔵文化財センター編1984『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ（昭和54・55年度）』石川県教育委員会

石川県埋蔵文化財センター1988『津幡町刈安野々宮遺跡』

石川県教育委員会1992『石川県遺跡分布地図』

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1993『加茂遺跡―第1次・第2次調査の概要』

石川県教育委員会1994『北陸道（北国街道）歴史の道調査報告書第1集』

石川県教育委員会1995『能登街道Ⅰ歴史の道調査報告書第2集』

石川県教育委員会1999『海の道と川の道・補遺歴史の道調査報告書第6集』

平川南監修・石川県埋蔵文化財センター編2001『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』（株）大修館書店

石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター2002『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』

石川県教育委員会2002『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）』

宇ノ気町史編纂委員会1970『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場

宇ノ気町史編纂委員会1991『宇ノ気町史 第二輯別巻集落誌』石川県河北郡宇ノ気町役場

宇ノ気町教育委員会1979『上山田貝塚―石川県河北郡宇ノ気町上山田遺跡調査報告―』

宇ノ気町教育委員会1987『宇ノ気町鉢伏茶白山遺跡』

宇ノ気町教育委員会1996『宇ノ気町気屋遺跡』

金沢市・金沢市教育委員会1996「金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ」（『金沢市文化財紀要』119）

河北郡役所1920『石川県河北郡誌』

小松市教育委員会1991「戸津古窯跡群Ⅰ」

小松市教育委員会1992「戸津古窯跡群Ⅱ」

石川県津幡町役場1962『津幡町小史』

津幡町史編纂委員会1974『津幡町史』石川県津幡町役場

津幡町教育委員会1980『津幡町谷内石山遺跡』

津幡町教育委員会1985『竹橋柚木谷遺跡』

津幡町教育委員会1990『谷内石山遺跡Ⅱ』

津幡町教育委員会2002『北中条遺跡A区』

〔論文・報告その他〕

伊藤雅文1999「48吉原親王塚古墳・法華堂古墳群」『金沢市史資料編19考古』金沢市

大西顕2002「第4章第2節 平成11（1999）年調査」『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター

柿田祐司・空良寛・久田正弘・松尾実2004「加茂遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第12号』石川県埋蔵文化財センター
角川書店1981『角川日本地名大辞典17石川県』

兼田康彦2000「加茂遺跡」石川県埋蔵文化財情報第4号』石川県埋蔵文化財センター

北川晴夫・松尾実2003「加茂遺跡（第8次）」『石川県埋蔵文化財情報第10号』石川県埋蔵文化財センター

小嶋芳孝1979「北加賀地域の概観」『北加賀地域古墳群分布調査報告』石川考古学研究会

座主哲二2002「加茂遺跡（第7次）」『石川県埋蔵文化財情報第8号』石川県埋蔵文化財センター

瀬戸薫1994「第1章第2節中世の北陸道」『北陸道（北国街道）歴史の道調査報告書第1集』石川県教育委員会

高堀勝善1970「第二章 原始より古代へ」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場

久田正弘・松尾実2003「指江B遺跡出土の埴輪片をめぐる」『石川県埋蔵文化財情報第9号』石川県埋蔵文化財センター

平川南2001「第4章第2節 古代の通行手形 - 過所様木簡」『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』平川南監修・石川県埋蔵文化財センター編 (株)大修館書店

平口哲夫1984「北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境」『石川考古学研究会々誌』第28号

平口哲夫1996「第6章 気屋遺跡出土の動物遺体」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会

藤則雄1970「第二編 十五 地形と地質」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場

藤則雄1983「北陸における新石器時代の海水面変動と気候変化」『北陸の考古学』石川考古学研究会

藤則雄1996「第4章第4節第2項 石器の石質」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会

平凡社1991『日本歴史地名大系第17巻 石川県の地名』

本田秀生2001「加茂遺跡（第6次）」『石川県埋蔵文化財情報第6号』石川県埋蔵文化財センター

松尾実2003「加茂遺跡における弥生時代の水田跡の紹介」『石川県埋蔵文化財情報第9号』石川県埋蔵文化財センター

三浦純夫1995「古代」『能登街道Ⅰ歴史の道調査報告書第2集』石川県教育委員会

宮本哲郎1991「英田廣濟寺跡を訪ねてー城郭寺院調査の記録（19）ー」『石川考古』第204号石川考古学研究会

森岡秀人2004「遺跡の個性は地域から発信を」『古代学研究』166号 古代學研究會

森田悌1992「古代加賀国の駅制」『日本海域研究所報告』金沢大学日本海研究所

安英樹2001「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報第6号』石川県埋蔵文化財センター

谷内尾晋司2002「第2章第1節 城館跡概観」『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）』石川県教育委員会

湯川善一2002「第8章第2節 指江 B 遺跡出土二～十号木簡」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター

四柳嘉章・四柳嘉之2002「第5章第1節 宇ノ気町指江 B 遺跡出土漆器の科学的分析」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター

〔図版・写真出典〕

図1：国土地理院発行「津幡」25000分の1を元に修正・加筆。

図2：新規作成（実測；松尾、トレース；高見）

図3：石川県教育委員会1992『石川県遺跡分布地図』を元に加筆。

写真1～2：新規作成（写真；松尾）

写真3～5：新規作成（石川県立図書館蔵・掲載許可 写真；松尾）

（金沢大学文学研究科史学専攻 高見哲士）

（奈良大学文学部文化財学科文化財博物館学専攻卒業生 長田政彦）

（財団法人石川県埋蔵文化財センター 松尾 実）